

土佐のわらべ

第434号 《第456回（2018. 10. 11）子どもの本の読書会記録》参加者9人・文書参加1人

『アイスクリームが溶けてしまう前に 家族のハロウィーンのための連作』

小沢健二と日米恐怖学会／著 福音館書店

現代のアメリカの家族のハロウィーンの楽しみ方を、洗練された文章とビビッドなイラストで伝えている、今月の課題本。この本で紹介されているハロウィーンは、家族みんなが子どもの心に返って楽しめる素敵な行事です。それぞれの家庭では、毎年、創意工夫を凝らした仮装を製作するようです。

家族で青トンボの仮装をした男の子、ロックも、ハロウィーンのことを大好きです。けれど、本の最後にはこうあります。

「ロックが本当に、ハロウィーンって大好きだ、って心から思うのは、ずっと先のこと。大学生のロックが、青トンボの家族になった時の写真を、遠い町で見る時のこと。でも、そんなのは、ロックはまだ知らない。」

家族で楽しく過ごす子ども時代の思い出は、その子の成長にとって大切な糧になる、そして、その子が大人になったとしても、人生を支えてくれる力になる、そういう作者の信念を感じる物語でした。

毎年撮りためた写真は、何年経っても、何度でも笑い合える、家族の大切な思い出になるのでしょうか。そんなハロウィーン文化を、とても羨ましく思います。

読書会では、本場のハロウィーンについてだけでなく、小沢健二という意外な作者についても盛り上がりました。

次に、読書会に参加したみなさんからの感想を紹介します。

・ハロウィーンは、日本のお盆の様なもので、生と死の境界が曖昧になり死者が帰ってくる日と思っているので、仮装して馬鹿騒ぎをする今の日本のハロウィーンが大嫌い。だから、アメリカのハロウィーンを知れてよかった。

・憧れのアーティストだった小沢健二の本で、楽しく読み終えることができた。ハロウィーンが、アメリカ文化に深く根差していると感じる。

・バングラディッシュから引っ越してきた女性が仮装した子ども達に驚くシーンでは、ハロウィーンの時期に留学生が撃たれた事件を思い出してしまった。

最後のページの、仮装した子どもの写真は、ハロウィーンの楽しい雰囲気が出ていてよかった。

・じっくり読むと、家族愛や、子どもを大事にする文化が伝わってきた。工夫を凝らして衣装をすることで、想像力や遊ぶ力の素地が作られていくのだろうか。

・渋谷ハロウィーンが話題になっているが、この本は、渋谷系と言われたオザケンが「ハロウィーンは本当はこんなものじゃない」ということを伝えたくて書いたのではないか。アメリカ人にも、日本にずっと住んでいる人にも書けないテーマだ。

・家族で過ごす昔の正月を思い出させてくれた。手作りの凧で遊んだりした、親子で過ごす時間は、今思い出しても楽しい。よその文化のいいところを吸収していく日本文化だけど、昔から根づく家族の伝統も絶やしたくないと思う。

・見ただけでハロウィーンの本と分かる色遣いの表紙。多色刷りの中身はコントラストがはっきりしていて、内容とぴったり合った装丁。ちょっと価格が高いと思ったが、中身を見ると納得。文章には、歌詞に通じる世界観を感じる。

・タイトルも内容も、言葉の選び方にセンスを感じた。ハロウィーン当日に向けて準備をした過程のことも、もっと知ってもらえたらいい。イラストは、アメリカテイストもありながら、日本にもなじみのあるタッチでよかった。

・タイトルの通り、「家族のための」おはなし。日本のハロウィーンは、小さい子か、若者のイベントか、という感じで、家族のイベントというイメージがない。何の仮装をするかについて、家族は結構話し合ったんだろうなと思う。親が子どもと話し合える家庭、どれだけあるだろうか。たいていは、親が決めた場所に子どもを「連れていってあげる」ことが多いのでは。親子で話し合う、というのは、大事なことだと思う。